

「男2人」でなく「男と女」?

藤ノ木古墳被葬者 考古学者が新説

透かし彫り入りの金銅製鍔金具など超一級の副葬品が見つかり、内外の注目を集めた奈良県の藤ノ木古墳。墓のあるじは、人骨を調べた人類学者の研究に基づき、「男2人」とされてきたが、考古学者の側から「遺物の特徴からみる限り、男女」との説が発表された。被葬者論争にも大転換を迫ることになりそうなお説。さして、議論のゆくえは――。

(宮代栄一)

「人類学者側と議論を」

藤ノ木古墳の被葬者について、聖徳太子の叔父で蘇我馬子に暗殺された穴穗部皇子と、宣化天皇の皇子ともされる宅部皇子とする説など様々な説があるが、これらは「男2人」という前提に基づいている。男女であれば、論争は振り出しに戻ってしまう。

出土装身具に着目

新しい解釈を発表したのは、奈良芸術短期大非常勤講師の玉城一枝さんだ。腕飾りや首飾りなどに使う、古墳時代の玉類の研究を続けてきた玉城さんは、2体のうち南側の人骨が、両足に濃い青色のガラス玉各9個(足玉)と、左手首にガラス製腕玉10個(手玉)をそれぞれ装着し



藤ノ木古墳の石棺内の遺物の出土状況(部分)

問題はその南側の人骨の残り具合が非常に悪かったことだ。歯の

一部と大腿骨、足の骨の一部などしか見つからなかった。人骨の男女の判別は普通、寛骨と言われる腰の骨に基づいて行われることが多い。女性の骨は男性のそれとは形が大きく異なるため、その的中率は9割以上とされる。次に指標になるのは頭の骨だ。男性の方が全体にこつこつ、目の上に当たる部分が張り出しており、保存が良ければ7〜8割の的中率が期待できる。

ところが、藤ノ木古墳の南側人骨はこれらの骨がまったく残っていないかった。そこであまり男女の鑑別に使われない「距骨」(足の骨)と「踵骨」(かかとの骨)に基づいて判定が実施された。

「足骨のみ」の弱さ

これらの骨に関しては一般に女性より男性の方が大きい傾向が認められる。そこで、片山さんらは近畿地方の明治時代の日本人や縄文人などの測定データをもとに、「距骨の場合は91.9%、踵骨の場合は99.99%」

の確率で、南側被葬者は男性と報告した。これに対し、玉城さんは「明治時代に日本人の計測を行った医学者ベルツによれば、当時の医学者によってかなり体格差が認められた。足骨だけで判定するのは元々無理があったのではないかと疑念を呈する」。

少ない人骨データ

とはいえず、不安材料がないわけではない。一つが、藤ノ木古墳と同じ近畿地方の古墳時代人に関する古人のデータが極めて少ないことだ。「古人骨は時代ごと、集団ごとの差異がかなりあるため、その人骨の属する集団の細かい特徴や計測値などがわかっていないかどうかが重要になる」(中橋さん)という。ところが、古墳時代の人骨は全般的に残りが悪い。このため、片山さんらも、時代の異なる縄文人などを比較資料にせざるを得なかった。

さらに、藤ノ木古墳の被葬者は、極めて高い地位の人物だった可能性があり、たとえ他の古墳時代人のデータがそろえられても、一般の中小規模の古墳の被葬者との間に、体格などの面で階級差が存在した可能性は捨てきれない。



藤ノ木古墳・石棺内の人骨の出土状況を示した図。南側被葬者の足の部分(右下)からまとまって出土しているのが足玉だ

今回の説について、近つ飛鳥博物館館長の白石太一郎さん(考古学)は「今までは人類学者の先生の意見を信じるしかなかったわけだが、考古学者の側から新しい材料が出てきたのは歓迎すべきこと」と評価する。これまで多くの考古学者は、出土人骨の調査を人類学者に任せきりにし、その結果を淡々と受け入れるだけだった。玉城さんは「今回の説が人類学者と考古学者が、深く議論を交わすきっかけになれば」と話している。